

# 日本の紅あかをつくる人

町での紅花生産の歴史は古く、上杉家の文書「邑鑑」むらかがみには、置賜領内最大の生産地であると書かれ、また、町の青木家に伝わる文書によると、置賜領内の紅花の半分以上を生産していたと書かれている。

しかし、第二次世界大戦時には、食糧増産のため、町でも県内でもその栽培が途絶え、「幻の花」になってしまった。戦後まもなく山形市で復活した紅花栽培。町での復活は、平成になってから。

安部武さん（十王）



佐藤良司さん（中山）

「もう一度紅花の咲いている風景が見たい、見せたい」と、「紅の花を咲かせる会」（現小松紀夫会長）がたつた6人で始めた取り組みだ。

このメンバーが始めた「紅花まつり」は、今年21回目を数えた。紅花に親しむ機会としての「紅花まつり」の開催も確実に生産者の増加に繋がってきた。今では、町あげてのしらたかの初夏のまつりとして定着している。



現在は、約30名が紅花を栽培し、紅餅だけではなく、花卉を乾燥させた乱花等も出荷している。

昨年、一昨年と豪雨に見舞われた白鷹町。ちようど紅花の収穫時期だった。それでも、懸命に花を摘み、加工し紅餅をつくった。それは、全国に紅花を必要としている人がいるから。「紅の花を咲かせる会」として当初から紅花栽培を行い、県紅花生産組合連合会副会長の今野正明さんは、紅餅の技術を伝承する活動も行っている。

観光紅花畑として、「紅花摘み猫の手隊」の受け入れをしてきた八卦地区のメンバーの一人安部武さんは、「もっと若い人たちに伝えてい



衣袋捷二さん（畔藤）

きたい」と話してくれた。

「今年は豊作だった」という佐藤良司さんの畑から摘まれた紅花は、約400kg。正に日本一の紅花生産者だ。畔藤地区で紅花を生産している衣袋捷二さんは、「紅花栽培を続けていくことが俺の目標だ」と笑顔で語った。

山形県の紅餅で本紅を作り続けている（株）伊勢半本店本紅事業部（東京青山）の島田美季企画販売課長は、「山形の紅餅でないと本紅が作れない」とその品質の高さを認めてくれている。

白鷹町が全国に誇れる紅花生産。確かな技術と様々な人の紅花にかける情熱が支えている。

紅花は、その栽培・加工方法すべてが400年前と変わらない手作業だ。先人たちが追い求めた、いにしえの紅（あか）をつくる町、白鷹町。

他にない、日本の原風景がここにある。全国からぜひ、お越しいただき、白鷹の夏を満喫してほしい。